会議議事録

事業名	平成２６年度「職業実践専門課程」の推進を担う教員養成モデルの開発・実証
代表校	一般社団法人　全国専門学校教育研究会

会議名	成果報告会
開催日時	平成２７年２月６日（火）、１４：００～１５：３０（１．５Ｈ）
場所	東京ガーデンパレス　３階　平安の間
出席者	①委員 浦山　哲郎、井本　浩二、佐竹　新市、安藤　　喬、國分　義史、山崎　　彰、川﨑　千春、河原　成紀、中越　　晃、片岡　　均、坪内　浩一、山本絵里子、鷲澤　文治、大平　康喜、伊藤慎二郎、岡村　慎一、飯塚　正成、永井　真介、大城　圭永、中島慎太郎、小野　紘昭、齋藤　　進、冨田伸一郎、山口　典子、日暮　　薫、三宅　英明、小林　昭文、信岡　誠三、長谷川綾子、芦澤　昌彦、新井　公一　（３１名） ②オブザーバー　（３２名） ③事務局　下島　耕一、佐藤恵美子、花田香央理（３名） （合計６６名）
議題	【議　事】 １．開　会 ２．主催者挨拶 会長　浦山　哲郎 ３．文部科学省挨拶 文部科学省生涯学習政策局生涯学習課専修学校 教育振興室　係　長　春田　鳩麿　氏 ４．議　題 （１）各分科会における概要と成果報告 ・インストラクショナルデザイン分科会 ・アクティブラーニング分科会 （２）評価委員会からの評価 （３）質疑応答 ５．閉会 【資　料】　・ＩＤテキスト/指導書　（各１冊） ・ＡＬテキスト/指導書　（各１冊）

	1.　開式の挨拶（永井委員） 2.　主催者挨拶（浦山会長） 3.　インストラクショナルデザインにおける成果報告 3.1. 概要説明（岡村委員） 職業実践専門課程を通じた教員の質保証・向上の推進を図るために、自分たちが学習することで、授業改善に活かせる手法として、インストラクショナルデザインを選んだ。これを広めるために、実効性のある方法の開発に取り組んだ。 3.2. 成果報告（日暮委員） ・職業実践専門課程とインストラクショナルデザインの関係について（指導書３頁：俯瞰図、４頁） ・ＩＤの概要と、本事業のＩＤについて（テキスト９頁、１９頁） ・指導要領と実証講座実施マニュアルについて（指導書５頁） ・実証講座実施記録について（指導書１３頁） ・事前アンケート結果について（指導書１５頁） 全国の専門学校教員を対象に、ＩＤの手法と授業について、ウェブ上にてアンケート実施し、５５２件の回答があった。（指導書１７頁） ・事前課題として行ったｅラーニングについて（指導書２５頁） ・今後の展望について、今後の課題と改善のための提案（指導書３２頁、３４頁） 4.　文部科学省挨拶（春田鳩麿氏） 5.　アクティブラーニングにおける成果報告 5.1. 概要説明（伊藤委員） 時期指導要領にＡＬが採用され、早ければ２０２０年にＡＬを使った授業を受けた学生が、専門学校へ入学される。専門学校にとって課題であるテーマに取り組めたことへの喜びと感謝を述べる。 5.2. 成果報告（小林委員） ・ＡＬの成果報告ということで、まず、両隣の方と自己紹介や名刺交換、近況報告を行う。これを授業の中で行うことで

	学生のモチベーションや集中力は格段に上がる。 ・アクティブラーニングとアクションラーニングの繋がりと、本事業の目的との関係性について ・ＡＬ型授業について どんなに上手な講義でも、聞いているだけでは受動的であるため、学習効果も程度がある。学生が少しでも発言し、能動的に学習することがＡＬの大まかな定義である。その能動的な時間をいかに授業の中で割合を伸ばすかが重要である。 ・ＡＬ型授業に取り組む目的として、ピーター・センゲのかかげる「つぶれない会社」になるには、「学習する個人」からチーム学習を経て「学習する組織」を作らねばならない。 ・文科省の方針（現在の指導要領）の説明 ・ＡＬ型授業（物理・小林委員）のプロセス説明 ・アクションラーニングの定義についての説明 6.　評価委員からの評価（芦澤委員） 6.1. インストラクショナルデザインの評価 ・本年度の研修開発において、カリキュラム作成については実施できていないが、シラバス・コマシラバス作成では方法論として確立できているとして評価できるのではないか。 ・実証講座の運営について、グループに分けて行われたが、違う分野の教師がグループを形成したため、学習目標やシラバス等の成果物をお互いが評価しにくかった。ＩＤを一定期間経験した教師同士か、同じ分野の教師同士でないと評価しづらい。 ・実証講座の講師による評価では、成果物のパターンと、それについての評価がノウハウ集として事前配布されていれば、より効果的ではないか。 6.2. アクティブラーニングへの評価 ・アクティブラーニングとアクションラーニングの統合性が見出しにくかった。 ・サブテーマとして、リーダーシップ論、コーチング論、ＫＪ法等の多様な手法が組まれており、教員向けの研修としてパッケージ化するにあったっては整理が必要だと感じられた。

	6.3. 実証講座の評価総括 ・ＩＤはテキストの表現上の問題、研修運営上の問題、企業との連携という点を除けば、シラバス・コマシラバス作成の方法論は確立している。上記問題を修正していけば、専門学校の教員養成・研修として成立できる。 ・ＡＬは、まず成功事例を見出して、そこから教育分野に適応できる方法論を確立し、次の段階で、企業との連携を行っていくべきである。 7. 春田氏より評価 ・特に地方の専門学校にて、同分野の学校等が少ない地域でも本研修が受けやすいよう、事業終了後、自律的にどう運営されていくかという点が重要である。 ・研修を指導していく講師の育成をどうしていくか。 8. 質疑応答 ・現場の教員は日々の授業にあたって、理想と現実のギャップを埋めるために力を入れているため、汎用性のあるプログラム開発に期待している。 ・研修受講者はどのような方が受けたのか。 →職業実践専門課程の認可を受けた全国４７０校の専門学校より公募し、ＩＤについてすでに実践されている方、口の方含め、２０名の教員の方にご参加いただいた。 9. 主催者より総括（浦山会長） 10. 事務連絡 ・本事業のホームページを２月末に公開予定。 11. 閉会

以上